

# コモンズ

— 学びの共同体 —

Commons

## ＝目次＝

- 宮城大学との連携授業「教養講義Ⅴ(地域連携演習)」…P1～2
- 観光創造コモンズ シンガポール研修を実施…P3～4
- ショウテンガイエイト…P5～6
- 学会や生協との連携による学習環境の創造…P7
- 芸術鑑賞・作品検証を通した奈良への理解…P8
- ビジネスプランコンテストへの参加を通じて…P9
- 地域をフィールドとした教育と調査～宇陀市における調査を通じて～…P10
- 新任教員の紹介/連携協定 締結について…P11

# 宮城大学との連携授業「教養講義 V（地域連携演習）」を実施しました

## ■ 教養講義 V（地域連携演習）の開講の経緯

平成 29 年 8 月 29 日（火）から 9 月 1 日（金）までの 4 日間、本学は宮城大学との連携授業「教養講義 V（地域連携演習）」を実施しました。この連携授業は平成 29 年 5 月 16 日（火）に「公立大学法人宮城大学と公立大学法人奈良県立大学の連携協定調印式」を行い、その協定での「教育課程編成及び学生への教育指導等を充実させること」の具体的な取り組みのひとつとして「教養講義 V（地域連携演習）」を開講しました。参加学生人数は本学生 24 名、宮城大学生 16 名です。



調印式の様子

これは、両大学が既存の枠組みや制度等を越えて、それぞれが持つ強み・特色を最大限に活かし、単独大学では実現できない多様性に富んだ「新モデル」となる教育研究活動を実施するため「公立大学版エラスムス計画」と称する連携協力を推進する具体的な成果です。

## ■ 教養講義 V（地域連携演習）の内容

本授業の目的は、「奈良と観光」を切り口に学生が主体的に「問題」を抽出し、その「問題」と的確に向き合う能力を養うところにあります。その際、いわゆる PBL（Project/Problem Based Learning）の手法を取り入れ、フィールドワークを行いつつ、①その「問題」を分析し、②「問題」を分類したうえで、③論を組み立てる作業をグループワークとして行い、④その成果を発表します。これらは「根拠を明確にすること」「前提を問い直すこと」「立場を入れ替えて考察すること」が必要となり、この思考演習を通じて、一見順調に見える事象の内にも「問題」を見出す洞察力、他者とともに「問題」と向き合う協働の力を養っていきます。



オリエンテーションの様子

1 日目は、宮城大学の学生と教職員が JR 仙台駅から JR 奈良駅までを早朝から昼過ぎまで新幹線で移動し、本学で本学の学生と教職員と合流し、オリエンテーション（概要、担当教員と学生の自己紹介、チーム編成等）、講義「奈良と観光（コンテンツツーリズム、地域との連携）」を行い、本授業のコンセプトや奈良でのコンテンツツーリズムの現状を学びました。その後、軽食会を開催して両大学の学生・教職員同士の親交を深めました。

2 日目は A チーム（テーマ：映像における都市表象と観光まちづくり）と B チーム（テーマ：

野生動物（シカ）の観光利用を考える）に別れ、それぞれのテーマの講義とフィールドワークを行いました。講義では、A チームは「映像における都市表象と観光の関係史」や「奈良の表象と観光まちづくり」等を学び、B チームは現代社会におけるヒトと野生動物との関わりの中で、「奈良のシカとヒトの関係史・奈良のシカの生態・シカとヒトとの軋轢と現状」等を学びました。また、フィールドワークは B チームが行い、講義で学んだことを現場で確認して新たな知見を得ることとなりました。

3 日目は A チームが王寺町、B チームが奈良市でフィールドワークを重点的にを行い、その成果を生かした問題の発見や整理とその解決アプローチ等をグループワークで取り組みました。その中で、学生は自分と考え方の異なる他者と協働する力を養い、問題に対処する際にどのようなアプローチが有効かを考察することに取り組みました。当日は非常に暑い日でしたが、熱中症への対策を万全に行い、奈良の地域資産が大きな観光資源になっていることを認識・再発見するものとなりました。

4 日目は両チームとも、これまで学んできたことをベースとして「奈良と観光」を切り口に「問い」を発見し、これを多様な視点から議論することに取り組みました。その後、各チームの教室で発表会を行い、その発表は「その問いは何か」「その問いを考えた背景」「既に調べて分かったこと」「今後調べること」を明らかにしつつ、ポイントを押さえた内容となりました。そして、クロージングを行い、4 日間の連携授業「教養講義 V（地域連携演習）」を終えました。



A チームの様子



B チームの様子

## ■ 教養講義 V（地域連携演習）の成果

参加学生 40 名に、授業前と授業後にアンケートを実施しました。このアンケートは「経験経済」という新しい学問領域での分析手法に基づくもので、40 名の学生が全体として自己の成長や学習上の新たな知見の獲得ができたと感じられる分析結果が出ました。

また、「参加してよかった。観光の知識だけでなく、チームで話し合う際のコミュニケーションスキルが身に付いたように思う」や「短い期間で多くのことを経験できたし、自分の力になった」等のコメントが学生から寄せられました。

このように、4 日間という短い期間でしたが、参加学生の新たな知見の獲得や成長の実感等のプラスがあったことから、連携授業の大きな成果といえると考えられます。

（地域交流センター COC/COC+推進室 特任准教授 増本 貴士）

## 観光創造コモンズ シンガポール研修を実施

観光創造コモンズ2年次生および3年次生の希望者20名が参加して、2017年9月16日（土）から9月30日（土）までの15日間、シンガポールにて国際観光・多文化共生・異文化交流などを学ぶことを目的とした研修を行いました。参加者はニースアンポリテクニク（Ngee Ann Polytechnic）（ポリテクニクとは日本の短大や高専にあたる高等教育機関）で現地の教員による授業を受け、さらに授業内容と関連した場所を訪問しました。

シンガポール出発前の前学期中には、定期的に事前学習会を開催しました。シンガポールの地理・歴史・政治・社会や文化などについて学習し、さらにシンガポール滞在中の安全管理についても理解を深め、基本的な知識や心構えを習得したうえで出発しました。

### ■ シンガポールを素材として国際社会のありかたを学ぶ

研修開始日の9月18日（月）は、午前中にオリエンテーションとして研修のスケジュール・担当教員の紹介・キャンパスツアーなどを行い、午後は現地学生との交流会が開かれました。グループごとに「日本の概要（地理・歴史・社会・文化）」「最近の日本（できごと・流行など）」「奈良の歴史と文化」「奈良県立大学」「日本の大学生の日常生活」について、プレゼンテーションを行いました。現地学生も奈良県立大学の学生に対して、シンガポールのこと、学校のことや学生生活のことなどを発表してくれました。奈良県立大学の学生にとっては、日本のことや日常生活のことなど普段当たり前に感じていることを英語でまとめて外国人にプレゼンテーションするという行為を通して、日本では気が付かない新たな発見があったようです。質疑応答では、現地学



授業の様子

生やニースアンポリテクニクの教員の方々から多くの質問が飛び交い、充実した時間を過ごしました。

研修二日目以降は、異文化コミュニケーション、シンガポールの歴史・政治・社会開発と国土開発政策・文化と人種・観光資源と開発などに関する授業が行われました。授業は全て英語で行われ、クイズやグループワークなども交えながらわかりやすい授業を展開してくださいました。さらに、現地学生も授業に参加してくれ、アシスタントとして奈良

県立大学の学生をサポートしてくれました。この研修プログラムの特徴の一つは、シンガポールの現状や課題を理解すると同時に、世界経済の中心地のひとつとして頭角を現す多民族国家シンガポールを素材として、国際社会のありかたを学ぶことにも焦点が置かれていることです。今後国際的な場で活躍する学生たちにとって、本研修の内容は非常に刺激的なものでした。毎日多くの課題が出され、宿泊先のホステルで必死に勉強する学生の姿が見られました。

### ■ シンガポール各所の見学

本研修では、教室での授業と連動してシンガポール各所の見学も行いました。例えば午前中に

多民族国家シンガポールの現状と課題を素材として多民族社会のありかたを教室で理解した後、午後はエスニックタウンであるリトルインディア（インド人街）とアラブストリート（マレー人街）を訪問し、資料館で各民族が辿った歴史を理解したりエスニックショップを訪問して人々の生活を垣間見たりしました。さらに、別の日にはシンガポールの都市開発を素材として持続可能な国際都市について学んだ後、シンガポール・シティ・ギャラリー（シンガポール政府都市再開発庁が運営する博物館）を訪問したり、シンガポールのコミュニティ開発を学んだ後、実際に地域のコミュニティセンターを訪問し、担当者から話を伺ったりしました。将来を見据えた戦略的な国土・都市・社会開発を行っているシンガポールの現状や課題を、現地視察を通してより良く理解することができました。



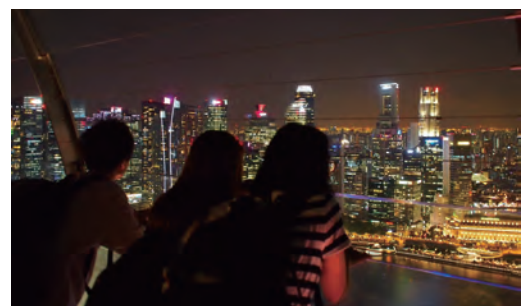
エスプラネード・シアターズ・  
オン・ザ・ベイの前にて

## ■ 週末を利用した自主的なフィールドワーク

研修期間の中間にあたる9月23日（土）と24日（日）は終日自由行動でした。多くの学生は、フィールドワーク科目での調査として、事前に自分自身でテーマを設定したうえで調査を実施しました。例えば、ある学生は、シンガポールの新たな観光資源として注目されるカジノを含む統合型リゾート施設であるマリーナベイサンズとセントーサ島を訪れ、それぞれの特徴と訪問客や施設内容の相違点を調査しました。さらに、別の学生はシンガポールの食文化を理解するために、スーパーマーケットや各民族が運営するエスニックショップを訪問し、販売されている食料品を細かく調べ上げました。フィールドワーク活動以外にも、ユニバーサルスタジオシンガポールを訪れたり、シンガポールのショッピングの中心であるオーチャードロードを散策したりしてそれぞれの時間を楽しみました。



シンガポールの象徴  
マーライオン像とマリーナベイサンズ



自由行動中の様子

週末の各種活動で得られた経験や知見は、研修最終日9月29日（金）午後に行われたシンガポール社会に関する最終プレゼンテーションに大きく反映されました。

本学では、「奈良の再発見を通して日本と世界に貢献する」を理念に掲げています。参加者は授業内で行ったシンガポールと日本や奈良の比較や、シンガポール人との交流を通して、日本や奈良の良さを再発見できました。さらに、シンガポールを素材として国際社会のありかたについて学ぶこともできました。この研修で得られた知識や経験を、将来の学習や仕事に生かしてもらいたいものです。観光創造コモンズでは、今後とも国際観光や国際社会の理解を目的とした研修を定期的に実施する予定です。

（観光創造コモンズ 専任講師 薬師寺 浩之）

# ショウテンガイエイト

奈良市中心市街地にある 8 つの商店街で取り組まれているイベント「ショウテンガイエイト」。これは演劇とまち歩きを通して商店街の魅力を再発見しようと、2015 年にスタートしたものです。今年度、奈良県立大学神吉ゼミ 3 回生がその活動に参加したので、紹介します。  
(8 つの商店街とは、三条通ショッピングモール、三条通り橋本商店街、もちいどのセンター街、下御門商店街、東向商店街、小西さくら通り商店街、東向北商店街、花芝商店街です。)

## ■「物語から物語が生まれる」ワークショップ

2017 年 11 月の演劇公演に先駆けて、その物語の題材探しを目的に、6～8 月に計 3 回開催された「物語から物語が生まれる」ワークショップに参加しました。実行委員会のメンバーと参加者が何組かのグループに別れ、それぞれが担当する商店街を歩き、その道中で出会った様々な人から聞いたパーソナルストーリーを持ち帰り、皆で共有しました。



まち歩き

## ■「天平ガールズ」による広報活動

さらに一歩踏み込んだ取り組みとして、1300 年前からやって来た女子大生「天平ガールズ」に私たち 3 人がなりきり、各商店街の店舗取材しました。奈良時代の天平人の視点で町を見ることで、魅力を再発見して紹介するという趣旨です。店主さんや従業員の方から話を聞き、それをもとにそれぞれが独自目線で素晴らしいと思ったもの＝「まほろばの証（あかし）」を見つけて、ショウテンガイエイトのフェイスブックページとフリーペーパーで発信しました。これらの編集・デザインなどでショウテンガイエイト実行委員の山本あつしさんと大阪芸術大学 1 回生の北田琳華さんと木村菜都子さんに協力していただきました。

取材したお店は、三条通ショッピングモールの「京ろまん」、下御門商店街の「万たろう」、東向商店街の「HEX HIVE」、もちいどのセンター街の「Caramel biscuit」、三条通り橋本商店街の「三楽洞」、小西さくら通り商店街の「刀祢米穀店」、花芝商店街の「ベニヤ書店」、東向北商店街の「本家菊屋」の 8 店舗です。



取材風景



フリーペーパー

## ■「超時空地域活性化演劇 ショウテンガイエイト」

時空を超え現代に現れた天平人の視点を切り口に、奈良の商店街のリアルな姿を浮き彫りにしてきた、「超時空地域活性化演劇 ショウテンガイエイト」。4 回目となる今回は、前述したワークショップで集めた物語をもとに、演出家の新居達也さんが演劇のシナリオを書き下ろしました。また私たちも、天平ガールズ役でお芝居に出演しました。



芝居のチラシ

## ■ 活動を振り返って

ショウテンガイエイトの活動を知った時、衰退した商店街を盛り上げるための活動なのかと思いました。しかし、実際に歩いてみるとシャッターを下ろしている店舗はほとんどなく、多くの人で賑わっていました。私たちはワークショップや取材を通して、各商店街で抱える課題が異なっていることを知り、また多くの人で賑わっている商店街＝活性化しているという単純なものではないということを学びました。



芝居の一場面

今まで何気なく通っていた商店街に演劇という形で関わらせていただき、新しい魅力をたくさん発見しました。演じるのは初めてだったので難しく、本当に魅力を伝えられているのかと不安になることもありました。しかし見に来てくださった方に「よかった」と言っていたいただいたことを誇りに思います。

(松下)



ショウテンガイエイトに参加して、奈良の商店街に対する愛着がわきました。また、ワークショップや取材を通じて、後継者問題や外国人観光客の増加による問題など、商店街ごとで抱える問題が違うということを学びました。広報活動や演劇によって少しでも商店街の魅力を伝えられたなら幸いです。

(安倍)



この活動に参加して商店街に足を運ぶ回数が増え、またじっくり見て歩くようになりました。お店の方の話を聞くことで、その人の思いや人となりなど目に見えない魅力を発見することができました。そしてその情報をどう発信したら良いかを学びました。反省もありますが、良い経験をさせていただきました。

(権代)



最後に、ショウテンガイエイト実行委員をはじめとした関係者の皆様、ショウテンガイエイトに関わらせていただき本当にありがとうございました。

(コミュニティデザインコモンズ3回生 安倍 愛里菜 権代 歌織 松下 未優)

# 学会や生協との連携による学習環境の創造

## ■ 奈良地理学会のエクスカーションへの参加

2017 年 10 月 8 日（日）に「川西町の歴史と産業」をテーマにした奈良地理学会のエクスカーションに参加しました。本学学生は、地域経済コモンズ2年生6名でした。この学外活動の目的は、①奈良地理学会の作成した巡検記事を活用し、川西町への理解を深める。②自治体が作製した町の紹介地図を利用して町内を歩きながら、その町の特徴を観察する。③地域経済コモンズの関連科目やこれまで自らが地域創造学部で履修した諸科目の授業内容と活動内容との関連性を考える。という設定で臨みました。午後 1 時に近鉄結崎駅に集合・出発しました。奈良教育大学大学院生の方からは結崎ねぶかに関するご説明をいただきました。学生の報告書をみると大和野菜として売られている結崎ネブカを出荷される前の状態で見ることができ、ネギが見た目がみすばらしく戦争時を思い出させるという理由で育てられなくなり、近年になってもう一度育てられるようになったことなど、結崎ネブカの歴史について知ることができました。またネギの出荷期間が長いことなど、ネギの生態についても知識を得られました。というような勉強になったことがわかります。



大学院生からねぶかの解説を受ける

## ■ 再生エネルギーとならコープ

10 月 13 日（金）に奈良県生活協同組合連合会主催になる再エネ施設見学会に参加しました。近鉄大和八木駅南口から 9 時に出発しました。本学の学生は地域経済コモンズの 4 年生が 1 名参加しました。主な訪問先は、木質ペレット製造工場（吉銘田原本工場）、木質ペレットボイラーを稼働している南奈良総合医療センター、そして今年 7 月に発電を開始した小水力発電所である東吉野つくばね発電所でした。参加の学生からは、木質ペレットの製造で「まだまだコスト面で問題があることや、自治体からの要望と補助金とのやりくりが大変そう」、そして、ペレットの利用に関して「興味深かったのは、木質ペレットはコントロールしにくいということ。重油のほうが使いやすいとのことであり、まだまだ改善の余地があると感じ」、さらに、「つくばね発電所における地域活性化は今までの勉強の中で触れてきたやり方とは少し違うものであり、しかしながらそこにある資源を活用するという部分においては共通点もあるなど大変興味深かった」という報告を受けました。これから卒業、就職を控え、少しでも自分自身が環境問題やエコといったものに関心をもつ良いきっかけになったことでしょう。



小水力協議会の皆さんとの懇談

（地域経済コモンズ 教授 小松原 尚）

## 芸術鑑賞・作品検証を通した奈良への理解

### ■ 県立美術館にて特別展「没後 40 年 幻の画家 不染鉄展」を鑑賞

2017 年 11 月 2 日（木）の 2 限目を利用して小松原担当の基礎ゼミにおいて学外活動を実施しました。活動の一つは県立美術館での特別展の鑑賞です。美術館作成のパンフレットによりますと、不染は伊豆大島から京都、奈良へと各地を転々として過ごした経歴や、緻密に描き込まれた富士



県立美術館玄関前にて

の絵など独特の作風がありますが、その画業には未だ不明な点も多い「幻の画家」です。学生に感想を求めると、家屋の絵はシンプルな配色で自然を描いた絵は色鮮やかに描かれていたこと、四季を描いた絵が多かったこと、特に今の季節との関連で秋を描いた作品が印象に残ったようです。また、美術など絵をかくのが苦手な学生からは、5・7・5 で「わたしには 無い感性が 素晴らしい」という感想がだされ、墨であんなに細かい表現

ができて、同じ人なのにすごいと思った。色のつけ方などもすごかったと句の説明がありました。尚、安堵町 黒滝村 岐阜県高山市 市町村交流 連携展示も見学しました。

### ■ 入江泰吉の主題による時空を越えたツアー体験

入江泰吉の作品は、カメラを絵筆のように駆使し、時には鮮やかな色彩に、またある時は水墨画の趣を出すという芸術写真としての理解が一般的に思います。一方で記録を念頭においた奈良



寺川商店と神社を観察する

の風景写真も存在します。戦後に入江の撮影した半世紀前のものと現在との比較は地域の構造的変容を理解する上でも助けになり、地域経済の学習にとっても意味のあることに思います。小松原の担当する基礎ゼミでは、『入江泰吉の原風景 昭和の奈良大和路 昭和 20 ～ 30 年代』（入江泰吉記念奈良市写真美術館編、光村推古書院 2011 年）を学外活動のテキストとして利用しています。このことは本誌 11 号 3 頁にても紹介したところです。今回の活動は県立美術館周辺で、67 頁と 28 頁を利用しまし

た。学生の観察報告によると、まず前者では、「新古諸道具 寺川商店」という暖簾は、当時のままでした。さらに、そこに隣接している神社は当時と変わらない景観でした。店の外見は全く変化しておらず、外壁のシミなども当時のまま残っていました。また 28 頁では、入江が撮影した当時は吉城川だった所が暗渠化され道路になっていたが、山の形はほとんど変化していなかった。奥の大仏殿も変わらずでした。入江本ツアーはこれからも続きます。

（地域経済コモンズ 教授 小松原 尚）

## ビジネスプランコンテストへの参加を通じて

2017 年 10 月 18 日、橿原商工会議所が主催する「かしはらビジネスプランコンテスト」に、サークルとして出場していた本学の学生グループとともに参加してきました。本コンテストは本年度で 3 回目となるイベントであり、今年は 19 グループが応募し、1 次予選を通過した 10 グループが本選に進み、10 月 18 日にプレゼンによるコンペが行われました。創業予定者、地元の企業関係者に交じり、大学生のグループも 3 組出場していました。報告テーマのジャンル分けをすると、観光客を主な対象としたサービス業（飲食、サービス、宿泊）、IT を使った新規サービスの開発、地域の課題解決型サービスの 3 つになります。私に関わった本学サークルの学生たちは、観光客を主な対象としたサービス業のうち、外国人観光客向けの料理体験型飲食店サービスに関するプレゼンを行いました。夏休みに入って以降、週に 1、2 回ぐらいいは、グループで集まるときに参加して、本番直前のプレゼンの指導などを行いました（写真左）。

参加した学生は全員 1 年生であり、地域経済コモンズの学生ではないのですが、私が地域経済コモンズの教員であることから、経済学や統計学の勉強をした成果を図表化し、1 年生とは思え



日曜日の練習風景



当日の報告の様子

ない堂々とした発表をしていました。残念ながら入賞することは出来なかったのですが、社会人に混じって、それに負けないぐらい（私の感覚ですと、全体の 1 位あるいは 2 位でした）素晴らしい報告、プランでした（写真右）。このように自分たちのホームグラウンドではないところに挑戦し、またグループで活動するという取り組みは有意義であり、これからも積極的に支援していけたらと思っています。

ただ参加して少し残念だったことがあります。かしはらビジネスプランコンテストは、審査の基準が非常に曖昧であり、またプレゼンの際に質疑応答がなく提案者に対するフィードバックがほとんどなかったことです。学生に対して次への意欲や改善点をきっちりと伝えることは、教育効果の上で重要な課題です。外部の団体による様々な企画はありますが、教員としては教育効果も高く地域への貢献も高い取り組みはないか、仕組み作りは出来ないか、そういった点もしっかりと考えていきたいと思っています。

（地域経済コモンズ 准教授 下山 朗）

## 地域をフィールドとした教育と調査

～宇陀市における調査を通じて～

奈良県宇陀市では薬草協議会という連携主体を形成し、歴史ある薬草の地として、薬草の生産に取り組んでいます。薬草協議会の構成員は、県、宇陀市、生産者からなります。本稿では宇陀市を対象とした地域における教育と調査について、今回、「湯揉み」と呼ばれる活動に焦点を当てました。「湯揉み」とは収穫された、大和トウキの根を出荷前に洗浄することであり、薬草協議会が中心となって実施しています。調査においてはまず問題意識をもつことがスタートとなります。

文献を参考にし、問いを立てました。参考にした資料は奈良県立大学ユーラシア研究センター事務局編『EURO-NARASIA Q』の第4号に掲載されている記事です。タイトルは「命の源にかかわっているのですから。ー農業という奈良・宇陀の地域資源」であり、この記事をもとに問いを設定していきました。本記事のインタビューイは薬草協議会の中心的人物である山口武氏です。この記事の中における「湯揉み」についての内容をまとめてみると、「湯揉み」は機械でできないこともないのですが、伝統的なトウキづくりの継承として



「湯揉み」の体験

で行っているとされています。これら記述を参考に学生は問いを用意し、「湯揉み」活動に参加しました。その問いは次のようなものです。「合理性があまりないように見える湯揉みはどの地域でも行われる単なる「作業」ではなく、「その地域独特の作業」となっているのではないか。そこから、その作業がある種の文化的な要素を持つようになり、参加者の中では、その作業が守るべき存在となり、大和トウキを中心とした薬草産業への住民の参加が、より一層促されている可能性がある。」

学生は実際に「湯揉み」に参加して、協議会の方に聞き取りし、「湯揉みはこのあたりの地域の文化をもとに行われており、はじまったばかりである。これから「その地域独特の作業」になっていくものだと考えられる。今後は、こうした作業が「地域独特の作業」となる過程をここから見ることができるかもしれない。そして、住民の意識と伝統産業にどう働きかけていくのか、観察できる可能性がある。」という一つの結論を出しました。本活動において、学生は自身で文献を読み、問いを立て、その問いに沿って、聞き取り調査を実施し、結論を導き出すという一連の研究調査活動のプロセスを把握できたのではないかと考えられます。今後も学生の自主的な活動の機会を提供していきたいと思っています。

(地域経済コモンズ 専任講師 山部 洋幸)

## 新 任 教 員 の 紹 介

ラナシンハ ニルマラ  
Ranasinghe Nirmala

専任講師（観光創造commons）



「国際ツーリズム論」「民俗文化論」を担当します。出身はスリランカです。2010年に日本に留学し、立教大学において観光学を専攻して研究を続けてきました。国境を越えた人の移動、観光開発や地域社会のあり方に関心があり、国際結婚や国際移住、多文化理解という他の分野とも関係をもち考察を行っています。国籍・宗教・ジェンダーというような社会・文化的規範から逃れ、心広く世界をみる人材が世界の希望だと思います。そのため、人と人との交流を大事にして、好奇心を持って世の中の様々なことを探り・体験する心を、大学生活・身近な世界から育てていってください。

## 奈良 NPO センター、奈良市地球温暖化対策地域協議会と 本学が連携協定を締結しました



奈良市地球温暖化対策地域協議会との締結式  
清水順子会長（右）と伊藤忠通学長（左）

奈良県立大学は、特定非営利活動法人奈良 NPO センターと、奈良市地球温暖化対策地域協議会（ならエコエコの和：略称「NEW」、平成 29 年 12 月 6 日に締結式開催）とそれぞれ連携協定を締結しました。

奈良 NPO センターには、本学において「NPO 論」の授業をご担当いただいているほか、本学学生に対しても、数々のフィールドワークの実習先をご紹介いただくなど、従来より多大なお力添えをいただいております。



奈良市地球温暖化対策地域協議会との締結式  
記念撮影

奈良市地球温暖化対策地域協議会とは、平成 25 年度より「地域創造学プロジェクト実習」として本学学生が中に入って取り組んだことを機に、現在も学生が参加をしやすいフィールドワークのプログラムを作っていただくなど、受入団体としてご協力をいただいております。

両団体とは、連携協定に締結することにより、より一層の協力関係を築き、現行の取り組みについても、その深化がはから

れることが期待されます。なお、奈良市地球温暖化対策地域協議会の活動につきましては、随時学生メンバーを募集しております。フィールドワーク科目を問わず 1 年生から参加することもできます。取り組みの具体的な内容について知りたい、あるいは参加をしてみたいという学生さんは、地域交流センター地域交流室（地域交流棟 1 階）までお問い合わせください。



〒630-8258 奈良市船橋町 10 番地  
TEL 0742-22-4978 / FAX 0742-22-4991  
お問い合わせは 月曜日～金曜日の午前 9 時から午後 5 時まで  
<http://www.narapu.ac.jp/>

奈良県立大学大学情報誌 Vol.12（2017年12月15日発行／発行：奈良県立大学地域交流センター地域交流室 TEL0742-93-7022）